

臨時特別号

Thinking Birds

事実が語る過去と今からシンキング

シンキング・バーズのデータ分析研究誌

Civil

特集

コロナ禍から考える
過去・現在・未来

シンキング・バーズ
歴史科学研究班／日本語研究班

季刊

目 次

■ 巻頭エッセー

宮沢賢治と「未来圏」 2

特 集

コロナ禍から考える 過去・現在・未来

「自然」からの革命
～Natural Revolution for us～ 3

「鎖国」から考える出入国管理
～「新型コロナ・ウィルス」と国家～ 10

■ *In My Life*

カタカナ語が注目される時
—災害時のことばの変化— 14

■ *Thinking about Nihongo*

ナチュラル語法と品性 15
—「食う」「寝る」「しゃべる」を読む—

巻頭エッセー

宮沢賢治と「未来圏」

遊佐 芳泰

宮沢賢治が逝去したのは、1933年（昭和8年）のことでした。享年37歳という若さでした。死因は、急性肺炎とされています。

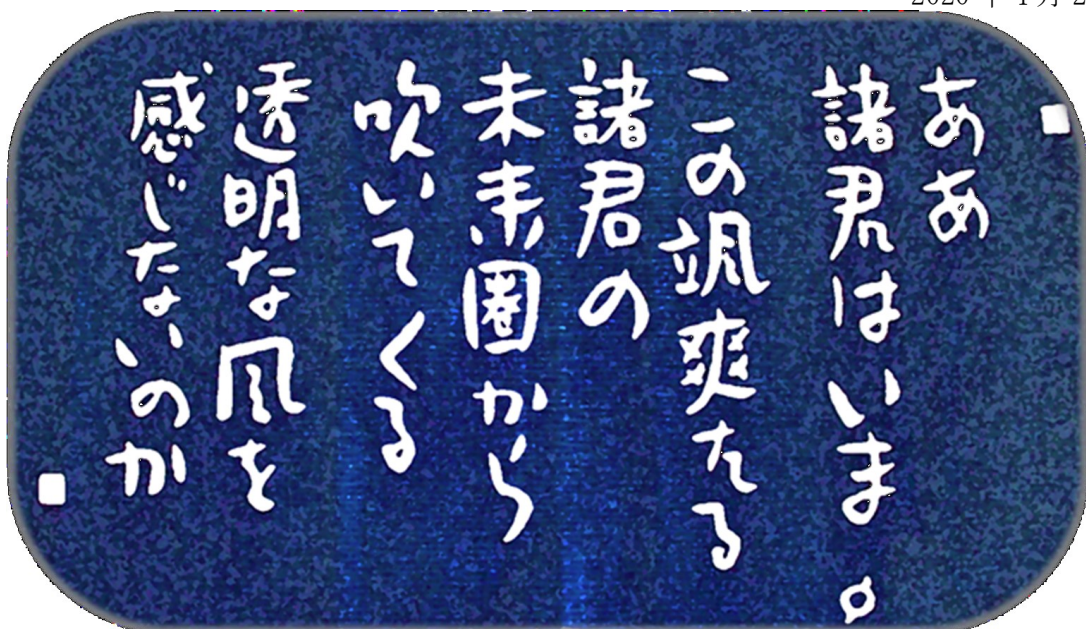
スペイン風邪（Spanish Flu）の日本での流行は、1918年（大正7年）から21年（同10年）とされているので、宮沢賢治がその疾患に感染したとするのは、無理があります。しかし、関東大震災（1923年）後の東京を訪れるなど、多忙な活動をしていた賢治は、原因不明の呼吸器疾患でこの世を去りました。勤務していた碎石工場の石灰粉が原因とする一説があります。

写真（下）は、賢治が母校（旧制盛岡中学）生徒に寄せた詩です。数十年前、私が高校を卒業した折に、卒業記念に頂いた南部織の敷物に染め込んであった詩です。それを撮影し、色調など一部加工処理を施したものを掲載します。

「未来圏」ということばは、賢治らしい日本語だと思います。ことばの具体性というより語感が先行しているような、「中身は後からついて来る」といった感じの日本語です。ある意味では、賢治による教師的なことば遊びなのでしょう。それは、「透明な風」ということばにも表れていて、ひねた見方をすれば、「透明じゃない風って、どんな風だい！」と言いたくなります。

でも、「未来圏から吹いてくる透明な風」ということばは、若者たちの夢を膨らませることばとして、十分に力強さを感じます。残念ながら戦前の日本は、その「未来圏」を惨憺たるものにしてしまいましたが、そんな過去とは異なる「未来圏」を、若者たちに贈りたいものです。

2020年4月27日



コロナ禍から考える 過去・現在・未来

歴史科学研究班編著

「自然」からの革命 ～Natural Revolution for us～



はじめに

新

型コロナ・ウィルスによるパンデミック（pandemic）は、世界史に残る出来事になりつつあるとボクたちは考えます。それは、21 世紀の人類がほぼ未経験だった感染症の世界的な蔓延（直接的な要素）と、1929 年に発生した世界恐慌以来の世界同時不況に陥る可能性（間接的な要素）とに大別できると思います。各国政府は、この危機に対して、「緊急事態宣言」や緊急経済対策などを駆使する対応に追われています。しかし、この論考を手掛けている 4 月末現在、出口が見えない状況が続いています。

ボクたち歴史科学研究班は、人類の近代史の考察を『「近代」というシナプス～連鎖する「近代革命」～』というタイトルで継続中です。「歴史」とは、継続的な連鎖の変遷ですが、ここでは、ボクたちの近代史研究の延長線上で、今回のパンデミックについて考えてみたいと思います。

「世界交通」は モンゴル帝国に始まった

ボ

クたちの近代史の考察は、15 世紀のヨーロッパを起点としています。その前史としてボクたちは、いわゆる「世界史（world history）」の起点を、13 世紀のモンゴル帝国の急拡大としました。「世界史はモンゴル帝国に始まった」です。ユーラシア大陸規模とはいえ、今日で言う「グロー

バリゼーション（globalization）」の歴史が、モンゴル帝国から始まったと考えるからです。そこには、遊牧生活というモンゴル族に固有な生活スタイルが関係していて、農耕を基軸に生活する人々やそのライフ・スタイルを、狩猟の対象とする勢力として歴史上に登場しました。その意味でモンゴル帝国は、一つの革命勢力（revolutionaries）でした。

モンゴル勢力の拡大によって、東西の物流が促進されたと言われています。ユーラシアの東西交易は、モンゴル帝国以

特集 コロナ禍から考える 過去・現在・未来

前にもありましたが、小規模なものでした。それに対してモンゴル勢力は、東は朝鮮半島から西は東欧圏域、南はアラブ世界や東南アジアにまで影響力が及び、イスラム商人が、物流の担い手として活躍したと考えられています。馬を活用し、草原地帯を高速で集団移動するスタイルを持っていたのですから、一つの「交通革命 (traffic revolution)」を実現したと言えます。後のポルトガルとスペインによる海上の「交通革命」と対比できる「移動する世界史」です。

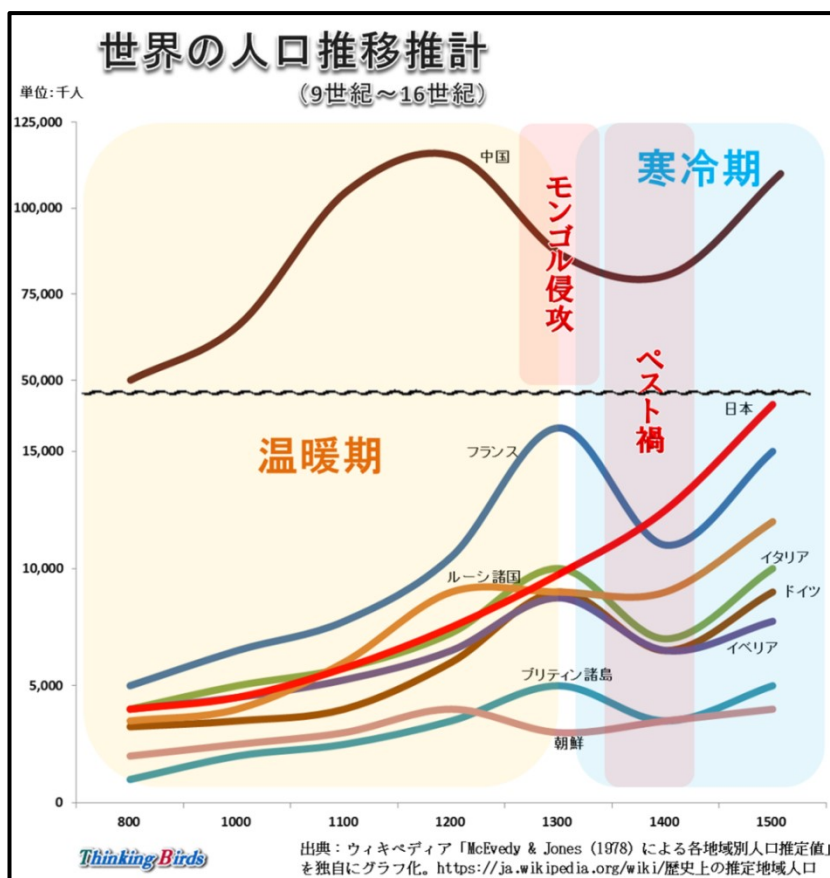
モンゴル勢力による「交通革命」は、中国で開発された黒色火薬の製造技術を、アラブ世界経由でヨーロッパにもたらしたことで知られています。ここでは詳しく述べませんが、13 世紀末から 14 世紀初頭にアラブ世界に伝わり、14 世紀中頃

までにヨーロッパに伝播したと考えられています。天然硝石を産出しないヨーロッパでは、人尿から人工硝石を精製する硝石丘が各地に造られ、黒色火薬を使用した火砲が、百年戦争 (Hundred Years' War 1337 - 1453) で実戦配備されたと言われています。黒色火薬の軍事利用は、戦争の形態を変える「軍事革命 (military revolution)」を呼び起こしたのです。

また、中世ヨーロッパ史上で稀有の災厄と語り継がれているペスト (la peste) の蔓延も、モンゴルがもたらしたとする説があります。ノミからネズミを介してヒトに感染したとされるペストは、「黒死病 (black death)」と恐れられました。ペストの猛威は、下グラフに示すようにユーラシア全域に及んだと考えられています。中国ではモンゴル侵攻による戦禍

とペスト禍で、人口が激減したとみられます。地球環境が、温暖期から寒冷期に移行した時期に相当します。ユーラシアでペスト禍を免れたのは、日本やインドなどの一部の地域だったとされています。

ヨーロッパにおけるペスト禍は、波状的に幾度も襲ったもので、単発的な災厄ではありませんでした。グラフが示す人口減少は、その第一波によると考えられます。通説では、1347 年にコ



特集 コロナ禍から考える 過去・現在・未来

ンスタンティノーブルで感染が始まり、1348年から51年までに、ほぼヨーロッパ全域に流行が拡大しました。近年の研究では、罹患率が高かったと推定されるイタリアで、対人口死亡率が50%~60%だったと試算されています。住民が感染を恐れて、村を放棄して移住した事例があったという記録が残されています。

当時の医学では、細菌やウィルスという知見はありませんでした。にもかかわらず、防疫の必要性が芽生え、肉食依存率が高かったヨーロッパでは、薬剤としての香辛料需要が高まりました。また、衣類や繊維などの煮沸消毒が始まったと言われています。ペストに対する本格的な治療技術の開発は、19世紀以降の近代医学の発達を待たなければなりません。ペスト禍後の15世紀頃のヨーロッパでは、信仰レベルとは異なる物理的レベルで、感染症への対処法の模索が始まったのです。

●スペインの中南米侵略と感染症

感

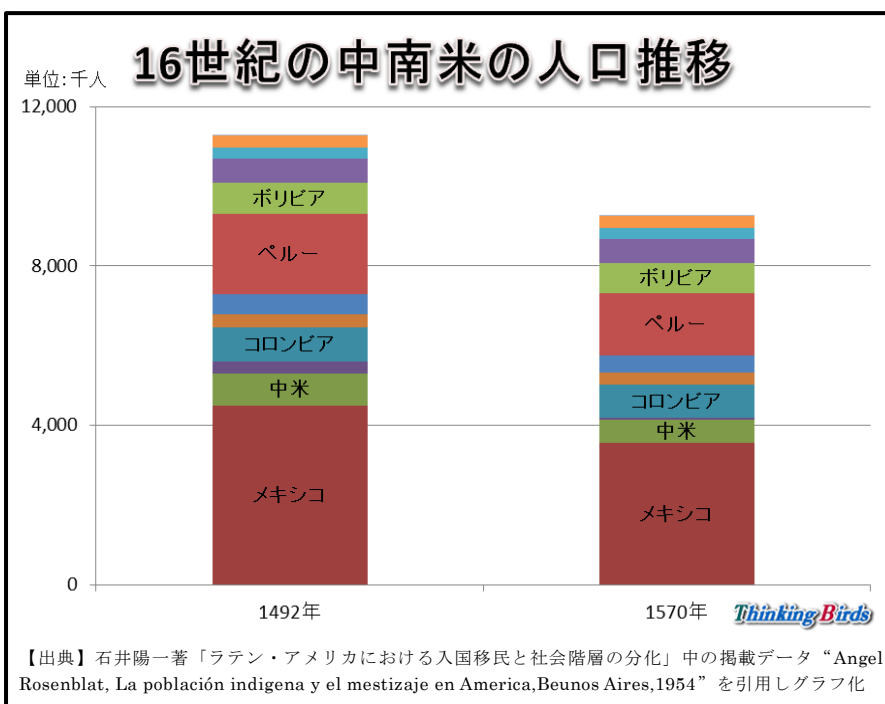
染症の歴史で忘れてはならないもう一つの事例は、スペインによる海上の「交通

革命」と共に起こりました。16世紀前半から顕著になったスペインの中南米侵略に伴う人口減少です。

この事例は、単なる感染症の拡大というより、スペイン人による原住民の虐殺、部族間の対立、メキシコやペルーでの銀山開発に伴う水銀中毒など、複合的要素の結果です。しかし、その人口減少は深刻なものでした。コロンブス（Cristóbal Colombo 1451?-1506）が西インド諸島に上陸した1492年から1570年までの約80年間で、中南米全体で約200万人減少したとする試算があります。人口8万人規模だったアステカ（Azteca）の首都テノティチトラン（Tenochtitlan 現在のメキシコシティ）は、急激に衰退したとされています。中南米の人口が15世紀末

の段階まで回復したのは、遅い地域で約300年後のことと考えられています。

アステカやインカ（Inca）などの文明圏で蔓延した感染症は、確定的なことは言えないものの、主に天然痘などと考えられています。原住民に免疫がなかった疾患とされていますが、感染源の特定は難しいのが



特集 コロナ禍から考える 過去・現在・未来

実情です。そこには、スペイン人に限らないヨーロッパ移民のほか、アフリカからの黒人奴隷や人身取引されたアジア系の人々の流入がありました。原住民を含めて人種のるつぼと化した場所が点在していたため、単純にスペイン人が持ち込んだ疾患とは断定できない側面がありました。

当事の中南米における感染症は、スペイン本国やメキシコとペルーの副王庁の政治的な無策もあって、ほとんど野放し状態で拡大したと思われます。医学的知見のなさに加えて、土地と原住民に対する「エンコミエンダ（Encomienda）」による征服領有権が、原住民を家畜同然に扱う風潮を形成しました。結果として、感染症対策がほとんどなさず、感染者は見捨てられて行ったと考えられます。

モンゴルのヨーロッパ侵攻とスペインの中南米侵攻による感染症の流行は、非接触だった人々同士が遭遇したことで拡大しました。そこには、陸上と海上の「交通革命」という人為があり、結果的に意図しないまま未知疾患の感染を呼び起こしたのです。

「交通革命」の連鎖はその後、陸上と海上に空路が加わり、大量高速輸送を実現したことはご承知の通りです。20世紀後半以降の人々の国境を越えた移動は、質量共に13世紀や16世紀の比ではありません。しかし、そこで遭遇する未知の「自然」が、ヒトに何をもたらす可能性があるかを、ヒトはまだ、十分に把握し切れてはいないのです。

「自然」を見る目と 「交通革命」の課題

ヒトを取り巻く生存環境について考える時、「自然環境（natural environment）」

と「社会環境（social environment）」は、対比的な要素と言えます。ここで言う「自然（nature）」とは、ヒト自身の生態を含む地球環境（global environment）の総称で、ちょっと厄介な概念です。“nature”は、「生まれついて備わった様態」のようなニュアンスの包括的概念だからです。

ボクたちは、ヒト自身に備わった「自然」と外部環境としての「自然」を、便宜的に切り分けて考えることにしています。前者を「内なる自然（inner nature）」、後者を「外なる自然（outer nature）」呼んでいます。「内なる自然」とは、生物としてのヒトの生体機能のような、ヒト自身に備わった性質などを指しています。「本性（ほんせい）」に近い意味内容です。「外なる自然」とは、外部環境としての「自然」全般を指しています。

その「自然」は、地球誕生以来、さまざまな変節を繰り返して来たと考えられています。大陸や海の生成、生命の誕生、地殻変動や生命の進化、気象環境の変化など、常に変化し続けているのが「自然」です。その移り変わる「自然」のことを、ここでは、「自然の浮動性（floating of nature）」と呼ぶことにします。

「外なる自然」の浮動性は、ヒトに恩

特集 コロナ禍から考える 過去・現在・未来

恵をもたらす要素と、危害を及ぼす要素の二面性を持っています。正の要素には、食糧やエネルギー資源の供給などが含まれます。負の要素には、地震や豪雨などの自然災害（natural disaster）のほか、感染症の脅威も含まれます。今般のウィルス感染症は、「外なる自然」の負の要素の脅威を、あらためてボクたちに見せています。

●「近代文明」に対する革命

ボ

クたちは、近代革命の連鎖の歴史を考察するにあたって、下記のような4つの領域を設定しています。領域同士は相互に関連し、重複し合いますが、歴史を動かして来た力点を分かり易くするための区分です。

- ① 技術的領域（technological fields）
- ② 経済的領域（economic fields）
- ③ 政治的領域（political fields）
- ④ 文化（社会）的領域（cultural fields）

この区分の中で、ヒトによる「自然」への直接の働き掛けを担って来たのは、「技術的領域」です。新型コロナ・ウィルスに関して言えば、臨床や防疫を担う医療スタッフの医療技術が、直接の働き掛けをしています。また、医療機器や薬剤、医療周辺資材などの製造や輸送を担う補完的な技術が、医療を支える領域と

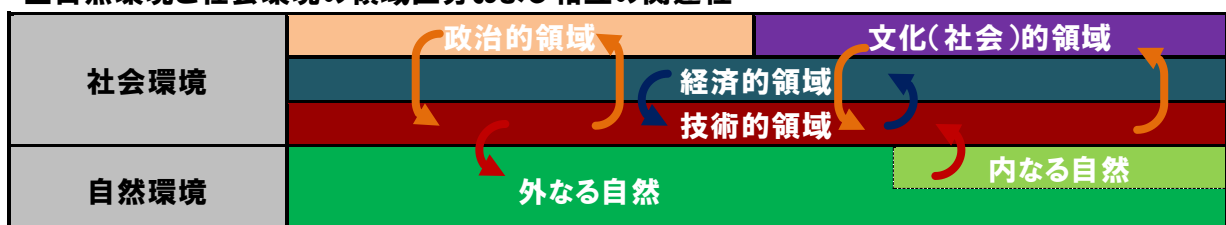
言えます。

一方、経済、政治、文化（社会）の各領域は、人々の「内なる自然」への働き掛けはできても、「外なる自然」に対してできることは、間接的な働き掛けだけです。カネを介して人々を結ぶ経済的領域、法や制度を介して人々を統御する政治的領域、宗教や思想、芸術や習慣などを介して人々の心に影響力を持つ文化（社会）的領域と分類できます。マルクスのな構造認識を改編して援用すれば、「自然環境」はヒトの生存の基底をなす「下部構造（Unterbau）」、「社会環境」は上記の4領域からなる「上部構造（Überbau）」と考えられるかもしれません。

「技術的領域」による「外なる自然」への働き掛けの成果は、歴史上では「文明（civilization）」の重要な構成要素です。農耕に始まり、数々の建設構造物、機械装置の発明や普及、物質の薬剤利用など、ヒトは「外なる自然」との関わりの中で、数々の人工物を生み出しました。

その「文明」は、「外なる自然」の負の要素に対して、文明的な防御策を講じて来ました。近年の日本では、水害対策として堤防やダム建設、津波対策として防潮堤の建設、予知能力を高めるための観測設備の整備など、いわゆるハード面の対策が講じられました。また、政治や

■自然環境と社会環境の領域区分および相互の関連性



特集 コロナ禍から考える 過去・現在・未来

文化の領域では、防災教育や避難訓練の実施など、いわゆるソフト面の対策を講じています。にもかかわらず、その対策の想定を超える規模で、「外なる自然」の猛威に見舞われているのが、近年の日本の状況です。

いわゆる近代主義（modernism）が、人類の生存環境の改善に相当の役割を果たしたことは、否定しがたい事実です。ヨーロッパ発祥とされる近代主義の成果は、「近代文明（modern civilization）」と呼ばれています。「近代文明」は、技術と経済の革新の連鎖を軸に、政治や文化（社会）の形態を変容させて来ました。医療分野では、高度な治療法の開発が、ヒトの健康寿命を確実に伸長させたことは事実です。「近代文明」は、ある意味では「自然」を人類の統制下に置くことを理想としたのです。

しかし、「自然」は、その人類の願望をよそに、人知を総動員しても制御などできない事態を頻出させています。《目に見えない脅威》の暴発という点では、福島第一原発事故の放射線しかりです。新型コロナ・ウィルスは、3カ月たらずというスピードで世界中に拡散し、人々の日常を見る見るうちに暗転させたのですから、これは、「近代文明」への「自然」からの革命と言える現象なのかもしれません。

●「内なる自然」のリテラシー

新 型コロナ・ウィルスによるパンデミックは、グローバル化の反作用として起こったことは、ほぼ確実です。ボクたちは、グロー

バル化を否定はしませんが、その矛盾と弊害は常にあると考えています。

ヒトの「内なる自然」とは、ヒトに備わった「野生（sauvage）」に関わる領域と言えます。かつてのモンゴルやスペインのような侵略行為は、その「内なる自然」の集団的暴発と見ることは可能です。19世紀に入ると、「見えざる手（invisible hand）」に促された人々によって形成された「世界市場（Weltmarkt）」が、マルクスの指摘に従えば、経済に統制されるヒトを大量に生み、今日で言う経済格差を拡大させました。しかし、マルクスの近代主義は、ヒトが経済を統制する社会システムを提唱したものの、結果的に閉鎖的な社会を生み出し、自滅に至る道を歩みました。

人類が、「自然」を完全な統制下に置くことなど不可能です。それは、ヒトの「内なる自然」についても同様です。冷戦後の世界が推進した国際的な「自由化」は、経済や文化の領域で「内なる自然」を野放しに近い状態に導きました。ヒトの内に潜む新たな「見えざる手」に日常の命運を委ねるような経済が、世界各地を結ぶ「交通（電子空間含む）」によって動いています。ボクたちは「自由」を愛しますが、「内なる自然」の良識あるリテラシーは必要と考えています。「自然」は、ヒトの「下部構造」などではありません。ヒトを含む環境そのものです。新型コロナ・ウィルスという「自然」は、ヒトによる「近代交通革命」の弊害と課題を、ボクたちに突き付けていると思うのです。

（2020年4月20日）

特 集 コロナ禍から考える 過去・現在・未来

【出典及び参考文献】

- ・歴史学研究会編『世界史年表 第2版』(2001年12月、岩波書店)
- ・山川堅太郎ほか編『世界史小辞典』(1972年、山川出版社)
- ・桑名一博編『西和中辞典』(1987年2月、小学館)
- ・福井毅ほか編『ロワイヤル仏和中辞典』(1989年、旺文社)
- ・国松孝二編『独和大辞典』(1990年1月、小学館)
- ・岩崎民平／小稲義男監修『新英和中辞典』(1977年、研究社)
- ・ジョーゼフT・シップリー著、梅田修ほか訳『シップリー英語語源辞典』(2011年3月、2刷、大修館書店)、水谷智洋編『改訂版 羅和辞典』(2009年3月、研究社)
- ・フェルナン・ブローデル著、村上光彦訳『物質文明・経済・資本主義 15-18世紀 日常性の構造1-2』(1985年11月-1986年3月、第2刷、みすず書房)
- ・宮脇淳子著『モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで (増補新版)』(『刀水歴史全書59』、2018年10月、刀水書房)
- ・吉田順一著「遊牧民にとっての自然の領有」(『シリーズ世界史への問い1「歴史における自然」』、1989年12月、岩波書店)
- ・佐藤洋一郎著『食の人類史 ユーラシアの狩猟・採集、農耕、遊牧』(中公新書、2016年3月、中央公論新社)
- ・島崎美代子著「遊牧社会・モンゴル国の食文化」(成長科学協会 第19回公開シンポジウム『子どもの食生活と心の発達』抄録、2006年6月、公益財団法人成長科学協会)
http://www.fgs.or.jp/symposium/past_symposium/from2001.html
- ・デヴィッド・W・アンソニー著、東郷えりか訳『馬・車輪・言語 文明はどこで誕生したのか (上) (下)』(2018年5月、筑摩書房)
- ・クライブ・ポンティング著、伊藤綺訳『世界を変えた火薬の歴史』(2013年4月、原書房)
- ・Wikipedia「歴史上の推定地域人口 McEvedy & Jones (1978) による各地域別人口推定値」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/歴史上の推定地域人口> (2019年3月10日閲覧)
- ・林玲子著「世界歴史人口推計の評価と都市人口を用いた推計方法に関する研究」(2007年6月)
- ・宮原ひろ子著「中世の温暖期と近世の小氷期における太陽活動と気候変動ー樹木年輪中の炭素同位体の分析からー」(気象予報士会東京支部第41回例会での講演資料、2009年2月、東京大学宇宙線研究所) <http://www.icrr.u-tokyo.ac.jp/1ry/article.html>
- ・安田喜憲著「ペスト大流行」(『講座 文明と環境「第7巻 人口・疫病・災害 II. 疫病と文明」』、2008年8月、朝倉書店)
- ・石坂尚武著『苦難と心性 イタリア・ルネサンス期の黒死病』(2018年3月、刀水書房)
- ・フレッド・ツァラ著、武田円訳『スパイスの歴史』(2014年4月、原書房)
- ・ギ・リシャール監修、藤野邦夫訳『移民の一万年史 人口移動・遥かなる民族の旅』(2002年7月、新評論)
- ・ボイス・ペンローズ著、荒尾克己訳『大航海時代 旅と発見の二世紀』(1985年、筑摩書房)
- ・ラス・カサス著『Brevisima relación de la destrucción de las Indias』(Real Academia Española)
https://www.rae.es/sites/default/files/HOJEAR_Brevisima_relacion_de_la_destruccion_de_las_Indias.pdf (挿絵参照)
- ・石井陽一著「ラテン・アメリカにおける入国移民と社会階層の分化」(『ラテン・アメリカ論集 第7-8号』、1974年度) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10289564>
- ・宮野啓二著「スペイン領ペルーにおける先住民の集住政策」(『社会情報学研究 Vol.2』、1996年11月、呉大学) <http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hbg/metadata/8341>
- ・布留川正博著「大西洋奴隷貿易の新データベースの歴史的意義」(『同志社商学 第66巻第6号』、2015年3月、同志社大学学術リポジトリ) <http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013951>
- ・宮城スサナ著「16世紀ペルー総督府の最初の日本人移民」(『都留文科大学研究紀要 第85集』、2017年3月) <http://trail.tsuru.ac.jp/dspace/handle/trair/795>
- ・クロード・レヴィ＝ストロース著、大橋保夫訳『野生の思考』(1982年12月、みすず書房)
- ・マルクス・エンゲルス著／廣松渉編訳、小林正人補訳『ドイツ・イデオロギー』(2002年10月、岩波文庫)
- ・アドルフ・ボルトマン著、高木正孝訳『人間はどこまで動物かー新しい人間像のためにー』

「鎖国」から考える出入国管理

～「新型コロナ・ウィルス」と国家～

歴史科学研究班編著

“keep it shut”の有効性 または、その弊害について



国家的な出入国管理に関する問題は、いわゆるグローバリゼーションへの反動という側面と犯罪集団や疾病などの拡散を防止するリスク管理という側面を持っています。前者は、主に経済的領域で「ヒト・モノ・カネ・情報」の移動が地球規模に広がった自由貿易の弊害が、地域的な産業や雇用などに深刻な影響を与えているとして、トランプ米大統領が唱えるアメリカ第一主義（American firstism）やイギリスのEU離脱のように、地域主権の回復を唱えるローカリゼーション（localization）の潮流を生んでいる現象のことです。後者は、社会的領域や文化（科学）的領域の色合いが強く、犯罪的な国際取引などの防止対策（麻薬の密輸出入など）、病害虫やウィルスへの防疫対策などが挙げられ、「新型コロナ・ウィルス」への国家としての対応も、その一つと言えます。

ボクたち歴史科学研究班は、江戸時代の「鎖国」について、世界史上で実効性があった国家的な出入国管理制度という

観点から、前近代的な制度だったとする従来の歴史観を再考する立場に立っています。もちろんボクたちは、江戸時代の「鎖国」を全面的に是認するつもりはありません。ただ、出入国管理には綱目（あみめ）設定が必要という視点で、その強弱が、国家の治安を左右する要素になるとは考えます。「新型コロナ・ウィルス」への各国政府の対応は、ある意味では鎖国的で、やむを得ない措置と言えます。その措置に伴う経済面への影響リスクはありますが、ウィルスの拡散リスクへの対応が、経済面のリスクに優先するのは妥当な判断です。

●「鎖国」の語源と「海禁」との連動



本史用語になっている「鎖国」は、1801年（享和元年）に長崎オランダ通詞の志筑忠雄（しづき ただお 1760 - 1806）が著した『鎖国論』が初出とされています。「鎖国」が完成したとされる1639年（寛永16年）から162年後のことで、江戸時代後期にできた用語です。

この『鎖国論』は、1690年（元禄3年）にオランダ船に便乗して来日したドイツ人医師のエンゲルベルト・ケンペル（Engelbert Kämpfer 1651 - 1716）が、

特集 コロナ禍から考える 過去・現在・未来

帰国後に書いた草稿が原典です。その死後に編纂され、『日本誌 (Geschichte und Beschreibung von Japan)』として刊行された書籍は、英語版経由でオランダ語に訳出され、志筑の『鎖国論』は、1733年刊版オランダ語本 (De Beschryving Van Japan) の付録部分が底本とされています。底本訳は、「今の日本が全国を鎖(とぎ)して国民をして国中国外に限らず、敢て異域の人と通商せざらしむる事、実に所益あるによりや否やの論」というケンペルによるとされた日本論です。「鎖国」は、傍点部分の志筑による略造語と言われています。底本の原語は、英語のままの“keep it shut”です。

『鎖国論』は、冒頭部分の「鎖国批判」と巻末部分の「鎖国礼賛」の矛盾、たび重なる編纂や他国語訳に伴う内容改変の可能性 (志筑本の書写者による創作的改変の可能性を含む)、最初のドイツ語の編纂本には“keep it shut (Behalten es Schließung)”に相当する字句がないなど、史料としての信頼性は、必ずしも高くありません。ただ、「日本は出入国を禁じ(管理)している」というニュアンスを、英語版で“keep it shut (閉ざしを保つ)”としたことは、ほぼ確かなようです。その“keep it shut”を「全国を鎖して」とした訳出が適切だったかは、評価が必要です。

日本史用語の「鎖国」は、江戸幕府が1633年(寛永10年)から39年までの期間に、5回にわたって公布した海外出入国に関する「禁令(日本史用語では「鎖国令」とされる)」と、それによって生じ

た日本の状態を指しています。39年のポルトガル船の来航禁止令で「鎖国」は完成したと言われ、1854年(嘉永7年)の日米和親条約の締結まで、215年間続きました。

いわゆる「鎖国令(5回の禁令)」の要点は、次のとおりです。

- ① 日本人の海外渡航の禁止
- ② 海外渡航日本人の帰還禁止
- ③ 外国人宣教師の国内居住禁止
- ④ 交易国の制限(中国とオランダ)
- ⑤ 外国船渡航地の制限(長崎・出島)

④と⑤に関しては、対馬藩の対朝鮮交易、島津藩の琉球を介した対中国交易、松前藩の対北方交易が、各藩に独占的に許可されていたとして、長崎を含めて「鎖国期」の日本の海外交易を、四つの「口」による交易とする見解があります。いずれにしても、海外とのヒトやモノの往来を、極端に制限した政策だったことは確かです。

江戸幕府が「鎖国」に踏み切った背景には、当時の中国(明及び清)と朝鮮(李朝)の海禁政策に呼応した側面と、ヨーロッパ勢力の国内での影響力拡大への懸念があったと考えられています。

前者は、いわゆる「倭寇」や豊臣秀吉による朝鮮出兵など、日本側の加害的海外渡航を規制する側面です。明と李朝は、基本的には海禁政策を採り、自由な往来はできませんでした。その東アジア的状况に、日本だけが無策な訳には行かず、呼応した政策と言えます。「出国管理」に該当する部分で、①がその条項です。モノの流出では、アジア屈指の銀産国だっ

特集 コロナ禍から考える 過去・現在・未来

た日本から、大量の銀が世界市場に流出する状態の抑制でした。婦女子など人身取引によるヒトの海外流出規制を含んでいたと考えるのが妥当です。

後者は、主にスペイン人とポルトガル人がもたらした文物や宗教が、幕府の脅威になることを懸念したという側面です。特にフィリピンを軍事的に制圧したスペインについては、キリスト教関係者の間でも、中国や日本への領土的野心がなかったとは言い切れないとする見解があります。また、オランダが台湾に統治拠点を置いた時代でした。「入国管理」に該当する部分で、②～⑤がその条項です。キリスト教の普及が最大の懸念材料で、在日ヨーロッパ人の処遇を定めています。江戸時代の「宗教弾圧」については、在日宣教師の政治的活動やキリシタン大名の追放を含めて、政治力学的な視点からの再考は必要と考えます。モノの流入では、主に東南アジア産の香辛料やマニラ経由の中国産生糸（密貿易品）などがあり、密輸入規制の側面がありました。

●出入国管理と網目の強弱

ヒ トとモノの自由な往来の促進は、経済活動にとって好ましいことは確かです。しかし、そこに負の側面が伴うことは否定できず、野放しの自由貿易や出入国が推奨されている訳ではありません。その負の側面に規制を掛けるのが出入国管理で、それを履行するのが政府（government）の役割です。

「鎖国」は、為政者の意向などお構い

なしに出入国が繰り返された戦国時代末期の日本の状態を考えれば、国内治安の安定を図るという点では、効力を発揮しました。渡海日本人によるアジア諸地域への侵害と、ヨーロッパ人や明人商人などによる国内拠点建設への懸念とを、治安維持の面から統制しています。だからこそ「鎖国」は、国家（union）的な出入国管理制度として、世界史上で近代的要素を持つのです。

しかし、「鎖国」には、行き過ぎがあったことは確かです。自給自足の経済環境の創出に伴う弊害として、ヒトとモノの移動が国内にほぼ限定され、結果的に諸藩や幕府の財政は、逼迫して行きました。外貨を持たない島国の閉鎖的経済環境では、新田開発をしても財政収支の改善に繋がりにくく、国家として「資本(capital)」形成が遅れたのです。また、文化面では、中国由来の東アジア的価値観に閉塞する結果を招いたことは否めず、その打開は、いわゆる「開国」を待たなければなりませんでした。

そのように考えると、出入国管理とは、「ヒト・モノ・カネ・情報」の自由な往来を規制する網目を、どのように設定するかという問題になります。網目を細かくすれば規制が強まり、荒くすれば弱まります。対外貿易の「規制緩和」は、網目を荒くするというベクトルです。

現代世界の多様で複雑な「ヒト・モノ・カネ・情報」の地球規模の往来は、それを野放しにしている国家が成り立たない半面、「鎖国」のような規制は時代錯誤です。時と場合に応じ、リスクが大きい

特集 コロナ禍から考える 過去・現在・未来

と考えられる対象を、一定の段階ごとに規制する措置が必要です。その意味では、「新型コロナ・ウィルス」への対応として、日本政府が講じた入国拒否などの措置は妥当です。

●自由と規制の二律背反

日 本の出入国管理が問われるもう一つの事例として、元日産会長のカルロス・ゴーン容疑者が、不当な方法で出国した事件があります。保釈中の身柄を十分に監視できず、盲点を突いたような逃亡でしたが、出国規制の問題点を投げ掛ける事例になりました。また、北朝鮮による拉致事件も、出国に関する盲点を投げ掛けている事例と言えます。

グローバリゼーションは、それを規制する必要性との二律背反を生んでいます。「新型コロナ・ウィルス」やカルロス・

ゴーン容疑者の逃亡問題は、地球規模の自由な往来が生む果実とそれがもたらすリスクが表裏をなし、簡単に世界に拡散（逃避）する現代の姿を提示しています。出入国管理の網目設定は、そういう世界を前提する必要がある、極めて困難な作業を伴うはずです。対象と強弱のバランスに、細心の注意を払う必要があるからです。

世界は今、グローバリズムへの反動期を迎えています。行き過ぎたグローバリズムが生んだリスク面が浮上し、閉鎖的な思考に走りやすい局面にあると考えます。しかし、閉鎖的な思考も度を超すと、「鎖国」の二の前になります。政府によって定められる網目設定が、国家や社会による弾圧（ネット上のヘイトを含む）を生む結果になってはならないのです。

(2020年2月12日)

【出典及び参考文献】

- ・志筑忠雄訳、杉本つとむ校註『鎖国論』（2015年11月、八坂書房）
- ・ロナルド・トビ著「「鎖国」という外交（『全集 日本の歴史 第9巻』）」（2008年8月、小学館）
- ・紙谷敦之／木村直也編『展望 日本の歴史 14「海禁と鎖国」』（2002年9月、東京堂出版）
- ・歴史学研究会編『日本史史料3「近世」 第2章 幕藩体制の成立と構造』中の「鎖国」に関する禁令（2006年12月、岩波書店）
- ・石見銀山歴史文献調査団編『石見銀山遺跡総合調査報告書 第5冊(改訂版)石見銀山関係歴史年表』（2002年3月、島根県教育委員会）
- ・海老沢有道・大内三郎共著『日本キリスト教史（前編 日本カトリック教史 第一章 キリシタン宗門の伝来 II キリシタン伝来の外的前提）』（1990年6月、日本基督教団出版局）
- ・平山篤子著『スペイン帝国と中華帝国の邂逅 十六・十七世紀のマニラ』（2012年02月、法政大学出版局）
- ・国松孝二編『独和大辞典』（1990年1月、小学館）
- ・岩崎民平／小稲義男監修『新英和中辞典』（1977年、研究社）

カタカナ語が注目される時

～災害時のことばの変化～



日本語研究班

「ソーシャル」な距離？

大きな自然災害が起こったりすると、ワタシ的には馴染みが薄かったことばが、何の前触れもなく、いきなり脚光を浴びたりします。新型コロナ・ウィルス騒ぎが渦巻く中、「ソーシャル・ディスタンス (social distance)」とか、「テイク・アウト (take out)」とか、「デリバリー (delivery)」なんてことばに接する機会が増えました。「ベビーカー」を「乳母車」と言って笑われた経験があるワタシとしては、「テイク・アウト」は「お持ち帰り」、「デリバリー」は「出前」で良いじゃないのと思ってしまう。いきなり脚光を浴びたカタカナ語が、いつまで長持ちするのか見ものです。

●「ソーシャル・ディスタンス」考

東日本大震災の頃に一世を風靡したカタカナ語に、「メルトダウン (melt down)」「シーベルト (Sievert)」「ベクレル (Becquerel)」「ソーシャル・メディア (social media)」などがありました。震災から間もなく 10 年が経過しますが、「メルトダウン」「シーベルト」はともかく、「ベクレル」ということばに接する機会は、めっきり減ってしまいました。「ソーシャル・メディア」に至っては、「S

NS」と言わないと理解されない可能性さえあります。ことばは流転するとはいえ、目まぐるしいことばの浮き沈みに、あらためて目が点になったりします。「目が点」なんて、最近は言わない？

ワタシたちの日本語研究は、流行語を追ってる訳じゃないので、脚光を浴びることばに深入りはしません。でも、研究課題の一つ「ソーシャル」は気になります。

ヒトとヒトが保つべき一定の距離のことを、どうして「ソーシャル・ディスタンス」と言うのか、内心は不思議に思っています。日本語で「社会的距離」なんて、みんなソッポ向くでしょうし、原語のままの方が良いとは思いますが、ここで言う「ソーシャル」って、何なんでしょう？

ワタシたちは“society”を、「社会的な繋がり」と理解しています。ヒト同士の繋がりが集団のようなイメージです。「繋がり」が希薄な群衆のような集団は、“people”と理解しています。スーパー・マーケットでレジ待ちするお客様 (customers) は、“people”の範疇じゃないの？

でも、「一定のルールを守ってお買い物をしてほしい」という願いが、「ソーシャル」を使わせるのかもしれませんが。ヒトとヒトは、ルールで「繋がってる」っていうことなのかな？!

(2020 年 4 月 23 日)

ナチュラル語法と品性

～「食う」「寝る」「しゃべる」を読む～



日本語研究班

品行方正が 良い訳じゃないけど...

日

常会話の中で、ほとんど無意識に使ってしまうことばは、誰にでもあるものです。

生活環境や交際関係、メディアからの影響や年齢層など、学校教育以外で身についた言語習慣は、一人ひとり異なっています。一般的に、そのヒトが生来的に習得した言語を、「地域のことば (dialect)」を含めて「母語 (native language)」と呼んでいます。また、「共通語 (common language)」に属さない「俗語 (slang)」と呼ばれることばや語法があります。でも、「共通語」同士なのに、使い方次第で、落差を生むことばがあります。

ここでは、その「共通語」のナチュラル語法として、「食う」「寝る」「しゃべる」について考えてみます。

●同義異語について

同

義異語 (同じ意味を表すちがうことば) は、日本語の中に数多くあります。代表的な例に「いる／おる」の地域分布があります。東日本を中心にした「いる」、

西日本を中心にした「おる」が、各エリアで使用頻度が高い傾向にあると言われています。両語法に優劣はなく、「～おります」が「～います」より、やや丁寧な印象を与える程度のちがいです。

今回取り上げる「食う」「寝る」「しゃべる」は、それとは微妙にちがう同義異語がある日本語たちです。「食う」は「食べる」、「寝る」は「眠る」、「しゃべる」は「話す」などです。品性 (character) という点では、各語共に後者に分があるかもしれません。

●「食う」という素行

女

性 (特に若い女性) が「食う」ということばを使うと、相手に引かれてしまうことがあるのは確かです。言うまでもなく、粗野で下品な印象を与えてしまうからです。

「食う」「食べる」は、いずれも古和語由来のことばです。「食 (ク) ふ＝食らふ」は噛みついて食するようなイメージ、「食 (タ) ぶ」は飲み込む (飲む) イメージの所作と考えられます。

そのため、近代日本語の「食う」は、男性がガツガツと、または、モリモリと食事する力強い、あるいは、品がな

いイメージが強くなりました。女性だって、ガツガツモリモリ食べることはあります。でも、満腹して「食ったーッ」と言うと、同席者がビビるかもしれません。「お腹いっぱい」とでも言っといた方が、カワイイのでしょう。

ワタシは、女性たちが「食う」ということばを使うことを、推奨はしないし、好ましいとも思いません。ただ、「食う」「食べる」には、古くから「生活する（生きる）」という意味があり、生命維持の重要な行為を指すことばでした。現代日本語で「食べて行く（食って行く）」は、「生活して（生きて）行く」という意味です。「生活して行く」には、時には荒々しさも必要で、女だって、いつもしおらしく「食べて」れば良いってもんじゃないんです。時にはガツガツ「食って」、近代日本語を異化してみたい。女性たちの「食う」には、そんな野性味願望が秘められてるかもしれません。

●「寝る」が誤解される時

本

来「寝る」と「眠る」は、必ずしも同義とは言えない日本語です。「眠る」が「睡眠する」という意味なのに対し、「寝る」は「からだや物を横たえる」という意味です。「寝る」は「眠る」の意味を含みますが、眠っていなくても寝ている状態はあるという関係です。「病気で寝ている」は眠っているとは限らない状態ですし、「竿を寝かせる」は物を横たえることを指しています。

その「寝る」は、時代と共に「眠る」の意味で使う用途が増えました。「お昼まで寝てた」は「眠っていた」ですし、「昨日は寝てない」は「眠っていない」です。この用法自体、ワタシ的には問題なしです。ややだらしな印象を与えろとはいえ、意味が通じるのですから、差し支えないはずです。

ただ、「セックスする」という意味での「寝る」は、問題を孕みます。「彼（彼女）と寝ちゃった」は、「セックスした」という意味が濃厚です。彼と寝て何をしようと、ワタシの知ったことじゃありませんが、それによって「寝る」が、誤解を招くことばになることを危惧するのです。

例えばあるヒトが、睡眠不足の状態を伝えようとして、異性に「寝たい」と言ったとします。この「寝たい」は、「眠りたい（眠たい）」なのに、相手は「セックスしたい」と誤解するかもしれません。セクハラ扱いされる可能性だってあります。ひと言の誤解が、大事を招きかねないのです。

「寝る」は、けして品性に欠ける日本語ではありません。でも、「寝る」がまとった猥褻でだらしな意味作用は、使い方によって誤解を招きます。ワタシだって、午後10時を過ぎて眠気で頭が朦朧として来ると、「もう寝よ」と言ったりします。起床時間が遅れたりすると、「今日は寝すぎた」です。ワタシの周囲では誰も、この「寝る」をセックスとは解釈しませんが、厳密には「おやすみ」や「寝過ぎた」なのでしょ

う。

その意味では、想定外のリスクを回避するため、「眠る」は「眠る」としっかり言った方が良いかもしれません。

●しゃべり語 vs. 聞かせ語

おしゃべりは、ストレス解消に良い方法の一つなんだそうです。おしゃべり好きは、女性に多い傾向があるという風説は、まんざら嘘ではない気がします。ストレス発散が目的のおしゃべりは、「しゃべる」こと自体に意味があるので、聞く耳は二の次です。そのため、「しゃべり合い」ともなると、おしゃべり競争の観を呈することがあるほどです。「話し合い」が、ある種の結論を導き出すためにあるのとはちがっています。

発語行為に関わる日本語は、「しゃべる」「話す」だけでなく、いくつかのことばが知られています。「言う」「語る」「述べる」などで、俗語として「ほざく」「ぬかす」「吹く」「こく」などもあります。各語の用法分岐は、言語学的にはたぶん、かなり細かい研究を重ねる必要があると思います。

発語という行為に対する言語感覚は、古和語時代には、会話にならないことについては、「吐く（ゲロする）」ことと結びついていたと考えられています。「吐く」は、異物を口から体外に出すという意味です。発語されたことばは、体内の異物を吐き出したかたまりのようなもの（コトダマ）でした。コトダマは、「気」のかたまりのような概念で

すが、口から出た排泄物と認識されることが多かった、とワタシは想像します。発語する側も、意味や真偽なんてお構いなく、汚物を吐き出すように「言った」のでしょうから、ある意味では、毒をまき散らす行為と紙一重だったかもしれません。

そういう発語行為（「ほざく」「ぬかす」「(ウソを) こく」「(ホラを) 吹く」など）の総称が、近代日本語では「言う」です。聞き流されるだけだったり、そもそも何言ってるのか意味不明（民謡の「チョイナチョイナ」みたいに）だったり、内容が問われない発語行為を含んでいます。「しゃべる」は、「ベラベラと」という副詞をつけることができるように、「言う」に輪をかけた発語行為を指すことは、皆さんがご承知のとおりです。「しゃべくる」「くっちゃべる」は、相手や周囲のことなんかお構いなし、ほとんど一方的な言いたい放題のことです。

それに対して「話す」「語る」は、ある種のストーリー性（論理展開）を持つ発語行為を指して使われます。発語内容の信頼性や妥当性はともかく、もっともらしく、説得力があるように聞かせるのが「話す」「語る」です。「言う（しゃべる）」は能動本位なのに対し、「話す」は受動本位なのかもしれません。聞き手の理解が、重要な要素になるということです。

そのため、「話す」「語る」は、ヒトの内側にある異物をことばに託して吐き出す行為とは、微妙にニュアンスが

Thinking about Nihongo

ちがいます。他者の心情や感情に届く理解を伴う言語活動でなければ、「話す」「語る」に値しないと言えるのです。

両者のちがいは、言語活動の根幹に関わる問題を示しています。言語は確かに、ヒトが内面に抱えた感情や心情を吐き出すツールという一面を持っています。意味不明なことでも、言っちゃえばスッキリすることはあり得ます。でも、言語は、ヒトとヒトとのコミュニケーション・ツールとして発達しました。伝わってナンボが、言語の役割なのでしょう。「しゃべる」と「話す」は、その両者のちがいを、ワタシたちに教えてくれる日本語です。

●言語としての「品性」



本語における「品性」の問題は、重要な課題の一つとワタシたちは考えています。

特に、ほとんど無意識のまま、ついうっかり使ってしまうナチュラル語法は、時として毒性を伴うことがあるからです。「ことばが汚い」という言い方がありますが、不用意なことば遣いで品格が問われるのは、ワタシとしては、好ましいことではないと思います。

もちろんワタシたちは、根も葉もないことをもってもらしく「話す」ことを、推奨したい訳ではありません。「食う」「寝る」「しゃべる」を弾劾するつもりもありません。ただ、ネイティブ・ジャパニーズについて書いた時も触れたように、ナチュラルな日本語には、レスペクト（敬意）に欠ける用法がと

ナチュラル語法と品性

ても多いのです。日本語は、その改善が必要なのですから、日本語としての「品性」への自覚を、避けて通ることはできません。

薬学は、クスリを毒と認識することから学び始めるのだそうです。ことばはヒトに、良い薬効をもたらします。半面、時として、とても強い毒になります。そのことへの自覚が、日本語の品質を高めるとワタシは思います。

(2020 年 1 月 27 日)



季刊 *Civil* 臨時特別号

2020年5月1日（初版）発行

編 者：シンキング・バーズ

歴史科学研究班／日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：シンキング・バーズ

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田 1 0 5 番 5 号

電話／F A X 0191-23-0724

※『Civil』に掲載されている著作物の著作権は、図表を含めてシンキング・バーズに帰属しています。複写、無断転載、無断転用はご遠慮ください。